The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新出土資料関係文献提要（十五）
Author(s)	椛島，雅弘
Citation	中国研究集刊. 2017, 63, p. 247-256
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70156
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　果号（総六十三号）平成二十九年六月　二四七―二五六頁

新出土資料関係文献提要（十五）

椛島雅弘

本提要は、『中国研究集刊』夜号（第六十一号）に掲載された「新出土資料関係文献提要（十四）」の続編である。今回は、二〇一五年に出版された書物を中心に取り上げる。以下、「原釈文」「工具書」「研究書（中文書）」「研究書（和書）」の四つに分類して紹介する。

原釈文

『北京大学蔵西漢竹書（伍）』（北京大学出土文献研究所編、上海古籍出版社、二〇一四年十二月、二三九頁、縦組繁体字）

北京大学蔵西漢竹書（北大漢簡）の図版（写真版）と釈文考釈とを収載した書。本書はその第五分冊にあたる。収録文献は、『節』・『雨書』・『揕輿』・『荊決』・『六博』の五文献である。

『節』の整理者は陳侃理氏。六十六枚現存する（綴合後は五十四枚）。簡長は二十九・八～三〇・〇センチ、幅〇・八～〇・九センチ、三道編綫。竹簡背面に劃痕が見られる。全二十章。内容は、陰陽・刑徳の原理、及びそれらに関連する政事・軍事の吉凶について述べる。

第三簡の背面に篇題の「節」の文字が見える。「節」は、「時節」の意味である。第一章と第二章は、二分（春分・秋分）、二至（夏至・冬至）、四立（立春・立夏・立秋・立冬）を用いて、一年を八つの時節に分けている。一時節あたり四十六日であり、『管子』軽重己・『淮南子』天文訓・『礼記』月令篇の記述と同様である。

また、第二・三・四・八・九・十章は、おおよそ陰

陽・刑徳の運行と、人事の吉凶が対応することを述べており、典型的な陰陽時令説である。

一方、第五・六・七章はやや特殊で、行軍作戦の法則について述べており、『漢書』芸文志の「兵陰陽家」に帰属させることができる。

『雨書』の整理者は陳蘇鎮氏。竹簡の残欠はやや深刻である。七十一簡現存する（綴合後は四十五簡）が、竹簡背面の劃痕から判断すると、若干の欠簡があることが予想される。簡長は三十二・一～三十二・二センチ、幅〇・八～〇・九センチ、三道編綫。満写簡には三十六～三十九字書かれている。第二簡の背面の上部に篇題である「雨書」の文字が見える。

総文字数は約一三〇〇字。前半部は、月ごとに章が分かれており、八月・十一月・十二月以外の月には一～三枚分の欠損が見られる。二十八宿を日付に対応させるという形式をとり、何日に「雨」「小雨」「大雨」といった気象が起こると災異が起こる、という内容である。例えば、「二月朔奎、雨。不雨、七月雨霜。（二月朔奎、雨ふる。雨ふらざれば、七月雨霜ふる。）」のように、二月の「朔奎」（一日を指す）に雨が降らなければ、七月に雨や霜が降ってしまう、という占辞を下す。

後半部は、上下二段に分欄筆写されている。上段は、十二支を用いて日にちを表し、「某日に雨が降れば、某日に晴れる」のように占う。下段は、占いの内容に多様性が見られ、雨だけでなく、風や雷から占辞を下すものも存在する。

『揕輿』の整理者は陳侃理氏。七十九枚現存する。（綴合後は七十四枚）簡長は、二十九・四～二十九・七センチ、幅は〇・八～〇・九センチ、三道編綫、竹簡背面に劃痕が見られる。第三簡の背面に「揕輿第一」の文字が見え、ここから篇題が決定された。総文字数は約二〇〇〇字。神煞の運行に関する表や、神煞を用いた占いが収められている。また、実際の占術の事例を複数挙げている。

これまで、揕（堪）輿の実態については、殆ど明らかにされていなかった。今回、『揕輿』が発見されたことにより、揕輿の形成・発展過程に関する研究が大きく進展することが予想される。

また、『揕輿』における占術の事例は、すべて戦国時代の楚国のものであり、昭甲・令尹子春をはじめとする楚国の重臣や、楚王の名、楚国の地名が見える。このことは、揕輿の術と楚文化に密接な関わりがあることを示

す。また、これらの情報は、戦国期の楚の歴史を明らかにする上で有益である。ただし、篇中の一部内容は、後人の編輯整理が行われた可能性があり、注意を要する。

なお、『揕輿』の内容は、馬王堆帛書『陰陽五行』と近く、その点でも注目される。

『荊決』の整理者は李零氏。三十九枚現存する。（綴合後は三十三枚）第二簡の背面には、篇題である「荊決」の文字の他、劃痕が見られる。「荊」は楚、「決」は「訣（秘術）」の意味であり、楚地における筮占の要訣を説く。

『荊決』の占法は、算筭（ちゅう）（計算道具の一種）三十本を用い、その束を無造作に上・中・下の三つに分ける。もし、それぞれの束が四本より多ければ、残り四本以下になるまで四本ずつ抜いていき、残った算筭を用いる。もし四本より少なければ、そのままの本数で占う。爻は三つに分かれ、上は横、中は縦、下は横に表示し、三つの爻から卦が形成される。それぞれの卦は、十干十二支に対応している。占辞については、それぞれ占辞を述べた後、末尾に吉凶の占断が述べられる。現在、合計で十六種の卦象が確認できる。

また、『荊決』の内容は、北大漢簡『日書』や、敦煌文献『周公卜法』と近く、その関係性が注目される。

『六博』の整理者は陳侃理氏。五十四枚現存する。（綴合後は三十九枚）簡長は二十九・八～三〇・〇センチ。竹簡背面に劃痕が見られる。第三簡の背面に「六博」の文字が朱書きされている。文献内には「博局図」（遊戯盤）が存在する。

六博とは、コマの進み方で勝敗を決めるボードゲームであり、或いは物事の吉凶を判断する占術である。盤上でコマが動く道を「博道」と呼び、博局図の博道には、日付を表す六十干支が割り振られている。また、博局図の後は占文部分であり、「病」「取（娶）婦」等の事柄に関する吉凶が述べられている。占う際には、占う日付と、投げたサイコロが存在する位置によって、事柄の吉凶を判断する。

『六博』は、尹湾漢簡『博局占』と同種の文献である一方、相違点も見られる。また、北大漢簡『日書』の中にも六博に関する情報が存在する。これらの文献を比較検討していくことで、六博の形成・発展過程に関する研究が大きく促進することが予想される。

なお巻末には、「本巻所収竹簡一覧表」に加え、陳侃

理氏「北大漢簡所見的古堪輿術」、同上「漢簡《堪輿》中的楚国紀年」が附されている。

『北京大学蔵西漢竹書（壹）』（北京大学出土文献研究所編、上海古籍出版社、二〇一五年九月、一八〇頁、縦組繁体字）

北京大学蔵西漢竹書（北大漢簡）の図版（写真版）と釈文考釈とを収載した書。本書はその第一分冊にあたり、『蒼頡篇』が収録されている。

『蒼頡篇』は、完整簡五十三枚、残簡が三十四枚現存し、綴合後は整簡六十三枚と残簡が十八枚の計八十一枚となる。簡長は三〇・二～三〇・四センチ、幅は〇・九～一・〇センチ。三道編綫。右契口が見られる他、契口付近に編縄の痕跡が確認できる。また、竹簡背面に劃痕が見られる。総文字数は一三三七字。字体は、隷書体だが、小篆の特徴も見られる。満写簡には二十字書かれている。

『蒼頡篇』は、これまで北大漢簡『蒼頡篇』以外にも出土しているが、どの『蒼頡篇』も、四字一句の構成や二句ごとに押韻している等、内容には共通点が見られる。一方で、北大漢簡本は、他の出土本と比べて保存状態が良好であり、今回はじめて同一の韻部に複数の章が存在するケースが確認された。また、北大漢簡本は、章題を複数の竹簡に跨いで書写されている。

北大漢簡『蒼頡篇』が発見されたことにより、文字学・音韻学の研究がさらに進むことが予想される。

なお巻末には、「北大蔵漢簡《蒼頡篇》一覧表」に加え、「北大蔵漢簡《蒼頡篇》非常用字現代音注」、「北大蔵漢簡《蒼頡篇》与其他出土簡本対照表」、「未見北大簡本《蒼頡篇》簡文集録」、朱鳳瀚氏「北大蔵漢簡《蒼頡篇》的新啓示」が附されている。

『北京大学蔵西漢竹書（叁）』上、下（北京大学出土文献研究所編、上海古籍出版社、二〇一五年九月、三〇二頁、縦組繁体字）

北京大学蔵西漢竹書（北大漢簡）の図版（写真版）と釈文考釈とを収載した書。本書がその第三分冊にあたる。収録文献は、『周馴』・『趙正書』・『儒家説叢』・『陰陽家言』の四文献である。

『周馴』の整理者は韓巍氏・閻歩克氏。分量は、完整簡と残簡を併せて二一九枚（綴合後は完整簡二〇六枚と残簡五枚）。その他、『周馴』本文と綴合させることが難

しいが、書体の観点から『周馴』に属する可能性がある残簡六枚が篇末に附されている。

完整簡の簡長は三〇・二～三〇・五センチ、幅は〇・八～一センチ、三道編綫、契口が存在する（右契口）。竹簡背面に劃痕が見られる。文字は成熟した漢隷に属し、北大漢簡の中では抄写が遅い部類に入る。満写簡は二十四～二十八字書かれている。第二簡の背面上部に篇題である「周馴」の文字が見える。また、第二一一簡の下部に「大凡六千」の文字が見えるが、その書体は草書に近く、本文とは明らかに異なる。一方、現存する『周馴』は約五千字であり、千字近く欠損している可能性がある。

内容は、周の昭文公が龏（共）太子に訓戒するという形式をとり、古代聖主賢君の故事を通じて国を治める君の道について明らかにする。故事の中には『呂氏春秋』・『説苑』と同様の内容が存在する。

また、『漢書』芸文志・諸子略道家類には「『周訓』十四篇」が著録されており、北大漢簡『周馴』との関係性が注目される。

『趙正書』の整理者は趙化成氏。第二簡背面の上部に、篇題である「趙正書」の文字が見える。現存する竹簡は五十二枚（綴合後は完整簡四十六枚と残簡四枚）で、欠損は少ない。

完整簡の簡長は三〇・二～三〇・四センチ、幅は〇・八～一センチ、三道編綫、契口が存在する（右契口）。竹簡背面に劃痕が見られる。満写簡は二十八～三十二文字書かれており、総文字数は一五〇〇字ほど。字体は漢隷に近い。

『趙正書』の「趙正」は秦の始皇帝であり、内容は始皇帝の第五次巡行の途中で病死してから、胡亥が他の公子・大臣を誅殺して位を継ぎ、秦が滅亡するまでの過程を記す。しかし、その記録の重点は、始皇帝臨終前の李斯との対話、李斯の言論、子嬰の諫言等に置かれている。また篇末には、著者の評論が加えられており、そこでは胡亥が国を滅ぼした原因が「不聴諫」だと強調される。

このような歴史叙述法は、戦国時代に流行した「語」類の古書に近い。成書年代は、字体や語句・語法から、前漢早期だと推測することができる。

『趙正書』の内容は、『史記』の記事と類似する一方で、内容がかなり異なる部分も存在しており、注目される。

『儒家説叢』の整理者は朱鳳瀚氏・陳侃理氏。十一枚現存し、その内完整簡は六枚、残簡が三枚で、合計九枚であり、原書の一部分のみである可能性が考えられる。簡長は三〇・一～三〇・三センチ、幅は約〇・八センチ。竹簡背面に劃痕が見られる。篇題は見られない。

三章に分かれ、内容は『晏子春秋』・『説苑』・『韓詩外伝』・『孔子家語』等の伝世文献に類似する。内容はおおよそ儒家の言論であることから『儒家説叢』と仮称された。

『陰陽家言』の整理者は朱鳳瀚氏・陳侃理氏。十七枚現存し、完整簡の簡長は二十九・五～二十九・六センチ、幅は〇・九センチ。綴合後は十二枚となるが、竹簡には欠損が多い。竹簡背面に劃痕が見られる。

文章は押韻している。内容は三つに分けることができる。第一部分は、天神感応について講じており、時令に違反した政治や、君主の行動がどのような天災を引き起こすのか論述する。銀雀山漢墓竹簡『人君不善之応』と語句が一部共通している。第二部分は、四時と「改火」が関係があることや、また天時に順応していることを述べる。第三部分は、天気と地気がどのようにして風・雨・霧といった自然現象を起こすのか述べる。

なお巻末には、「本巻所収竹簡一覧表」に加え、韓巍氏「西漢竹書《周馴》若干問題的探討」、趙化成氏「《趙正書》与《史記》相関記載異同之比較」の両論文が附されている。

工具書

『簡帛書実用字典』（鄭曉華著、上海辞書出版社、二〇一五年五月、三八七頁、縦組簡体字）

簡帛資料の字典。戦国簡（楚簡）・秦簡・漢簡・帛書の文字写真を載せる。「拼音索引」と「筆画索引」の二種類の索引が存在する。

一般的に、簡帛関係の字典は、駢宇騫編『銀雀山漢簡文字編』（文物出版社、二〇〇一年）、李学勤主編・沈建華・賈連翔編『清華大学蔵戦国竹簡【壹―叁】』（中西書局、二〇一四年）のような竹簡群ごとの字典か、湯餘恵主編『戦国文字編（修訂本）』（福建人民出版社、二〇一五年）のような、時代別の字典が主流である。

一方本書は、引かれている例は多くないものの、竹簡の種類や時代といった区分を設けずに収録しているという点で有用である。

研究書（中文書）

『戦国竹書形制及相関問題研究—以清華大学蔵戦国竹簡為中心』（賈連翔著、中西書局、二〇一五年十月、二九〇頁、横組繁体字）

竹簡の形制及び劃痕、符号、編号、書法、工具、整理、保存について考察した書。「清華簡《繫年》与古史新探研究叢書」の一つ。「緒論篇」「修治篇」「繕写篇」「整理篇」から構成される。

「緒論篇」は第一章「古代書籍形式的演進」、第二章「先秦竹書大観」、第三章「竹書制度的研究与意義」から成る。第一章では、書写材料の発展過程について述べる。第二章では、竹簡の出土について、漢代の孔壁書から、近代出土の信陽楚簡を経て、近年発見された上博楚簡・清華簡に至るまでの流れを紹介する。第三章では、竹簡形制の研究史を四段階に分けて振り返る。

「修治篇」は、第四章「戦国竹書的取材及特性」、第五章「戦国竹書的修治」、第六章「簡背刻劃工芸的発現与研究」、第七章「戦国竹書的尺寸」から成る。第四章では、竹の分布、種類に関する考察に加え、竹の年代測定法（いわゆる炭素14年代法）や、竹の含水率に関する論述が見られる。第五章では、竹を竹簡へ加工する際の道具や、その過程について述べる。第六章では、近年特に注目される劃痕について、実例を挙げつつ分類し、また劃痕をつける課程やその役割について述べる。第七章では、戦国簡文献の簡長をまとめた表を掲げた後、長さ別に分類し考察する。

「繕写篇」は、第八章「文字的繕写和工具」、第九章「文字佈局和符号使用」、第十章「書手字迹和文字補正」、第十一章「次序編号与題記」から成る。第八章では、筆や墨、硯等の工具に関する考察を行う他、竹簡に書写する際の筆画について考察する。第九章では、竹簡へ筆写する文字の字数・位置に関する考察や、符号に関する考察を行う。第十章では、書法に関する考察や、誤写した際の修正作業について述べる。第十一章では、主に清華簡の背面に見られる編号や篇題に注目する。

「整理篇」は、第十二章「竹書的収捲与編連」、第十三章「竹書的搶救与保護」、第十四章「竹書図像的獲取、後期処理与出版」から成る。第十二章では、竹簡に裏写りした墨迹に注目し、墨迹の残り具合から、元々どのように竹簡が巻かれていたのか再現する。第十三章では、清華簡の保護作業を行う際行った方法について紹介する。第十四章では、清華簡の撮影から図版出版までの課

程について解説する。

本書は、竹簡の形制やその周辺領域について、具体例を多く挙げ、網羅的に取り上げる点で特徴的である。

研究書（和書）

『戦国秦漢簡牘の思想史的研究』（中村未来著、大阪大学出版会、二〇一五年十一月、三四二頁、縦組和文）

上博楚簡・清華簡・銀雀山漢簡所収の文献について、それぞれ思想史的な考察を加えた研究書。第一部「「上海博物簡蔵戦国楚竹書」の研究」、第二部「「清華大学蔵戦国竹簡」の研究」、第三部「「銀雀山漢墓竹簡」の研究」の三部から構成される。

第一部「「上海博物簡蔵戦国楚竹書」の研究」では、『鄭子家喪』・『成王既邦』を取り上げる。第一章「上博楚簡『鄭子家喪』の検討」では、『鄭子家喪』の釈読を行った後、『鄭子家喪』の内容を『左伝』・『史記』をはじめとする伝世文献と比較し、特に天と上帝・鬼神との関係について注目する。そして、『鄭子家喪』と伝世文献とで差異が見られることを指摘する。また、上博楚簡中に含まれる他の楚国故事と比較しながら、『鄭子家喪』が楚国の教誡書として編纂された文献であることを指摘する。第二章「上博楚簡、『成王既邦』の検討」では、『成王既邦』の釈読を行った後、文献に登場する周公旦の言説―特に「天子の正道」について考察する。また、『成王既邦』の周公旦像に明らかにすることにより、文献が戦国中期頃、周公旦を尊崇し賢者へと高める動きの中で、儒者により作られた、或いは受容された文献であると予想する。

第二部「「清華大学蔵戦国竹簡」の研究」では、清華簡『周武王有疾周公所自以代王之志（金縢）』（以下、清華本『金縢』と略記）・『傅説之命（説命）』・『尹誥』を取り上げる。第一章「『周武王有疾周公所自以代王之志（金縢）』の検討」では、清華本『金縢』の釈読を行った後、清華本『金縢』と今本『尚書』金縢を比較する。そして、両篇の成立には、周公旦の封じられた魯国の人々が関係していることを指摘する。第二章「清華簡『傅説之命』（説命）の文献的特質―天の思想を中心に」では、清華本『傅説之命』と『尚書』説命を比較した後、『傅説之命』に見える「天」について考察する。第三章「清華簡『尹誥』における呼称表記の検討」では、『尹誥』を中心として、伝世文献や他の清華簡に見える伊尹の呼

称について分析する。そして、伊尹を「伊摯」と表記することは、南方の文献によく見られることから、『尹誥』も南方（楚）と関わりの深い文献である可能性を指摘する。

第三部「「銀雀山漢墓竹簡」の研究」では、銀雀山漢簡「兵之恒失」・「五議」を取り上げる。第一章「銀雀山漢簡「兵之恒失」小考」では、「兵之恒失」を釈読した後、その内容・構成が『孫子』・『孫臏兵法』と近似することを指摘する。第二章「銀雀山漢簡「五議」小考」では、「五議」を釈読した後、内容を分析し、「五議」が道家や儒家、兵陰陽家等の枠に縛られない、現実的視点から国策を論じる文献であると推測する。

本書は、時代性、学派、地域性について限定することなく文献を取り上げ、広大な視点から古代中国思想史にアプローチする点に特徴が存在する。なお末尾には、出土文献の用語解説等が附されている。

『戦国縦横家書　馬王堆出土文献訳注叢書』（大西克也・大櫛敦弘著、東方書店、二〇一五年十二月、二五〇頁、縦組和文）

馬王堆出土文献訳注叢書シリーズの一つ。本書は、馬王堆漢墓帛書『戦国縦横家書』を取り上げ、「解題」と「訳注」の二つから構成される。以下、「解説」に沿って、『戦国縦横家書』について簡略に紹介する。

『戦国縦横家書』は、中国の戦国時代に外交で活躍した人々の書簡や故事を集めた文献であり、内容の中には『史記』や『戦国策』に類似する内容が見られる。標題はなく、内容から『戦国縦横家書』と命名された。

全二十七章のうち、十一章は伝世文献と同内容の記事が見える一方、これまで知られていなかった佚文は十六章にのぼる。佚文が史料として多大の価値を有することはもちろん、共通する内容についても、相互の比較・検討において貴重な史料だということができる。

また、内容や形式から三部に分けることができ、それぞれ異なる特徴が見られる。

『竹簡学入門―楚簡冊を中心として』（陳偉著、湯浅邦弘監訳、草野友子・曹方向訳、東方書店、二〇一六年十二月、二一六頁、縦組和文）

陳偉氏の『楚簡冊概論』（湖北教育出版社、二〇一二年）の総論に該当する部分である緒論と第一章、第二章、第八章、第九章を翻訳し、全四章に再編した書。内

容は、楚簡を中心とした竹簡に関する概説である。

第一章「楚簡の基礎知識」では、楚簡の定義、楚簡を含めた簡牘の種類・形態、また書写形式について、実際の写真を挙げながら解説する。

第二章「発見と研究」では、これまで発見された楚簡について、地域別（湖南省、湖北省、河南省）に紹介すると共に、出土地不明で骨董市場から購入・収蔵された楚簡についても紹介する。

第三章「整理と解読」では、簡牘が発見されてから、その整理方法・過程や、テキストの復原について解説する。また、楚簡をどのように解読するのか、「字形」と「文例」という点から、具体例を挙げて説明する他、綴合（残簡同士を接合して復原すること）、編聯（竹簡を配列すること）、篇章の分合について、実例を複数挙げながら述べる。

第四章「出土文献の研究」では、竹簡資料の中で最もまとまりのある「文献（典籍）」について、その一部を取り上げ、『漢書』芸文志の図書分類に沿って紹介する。紹介は、特に文献の編纂時期及び地域性に注目している。

また、末尾に「用語解説」が附され、本文中で用いられる専門用語について解説している。

本書は、楚簡の内容概説に留まらず、整理・釈読の方法について、文字の隷定から綴合・編聯まで、多くの実例を挙げて解説している。この解説を読むことによって、どのように楚簡（を含めた竹簡）資料を釈読していけばよいか学ぶことが可能である。